

土砂災害に

警戒を!!

市内各所で浸水、土砂災害が発生

7・13豪雨

近年、局地的に短時間で激しい雨量を記録するゲリラ豪雨が頻発しています。また、梅雨末期の大雨によって土砂災害などの甚大な被害が発生するケースが全国的に見られます。

多久市でも、昨年7月13日の豪雨で、床上・床下浸水、土砂災害が発生し、市内各所に大きな傷跡を残しました。

昨年の7・13豪雨を振り返って、直接命に関わる土砂災害への警戒と、迅速な避難のために日頃から災害への備えや、家庭・地域での避難場所や避難経路を再確認しておきましょう。



▲急傾斜地のがけ崩れが発生し、土砂により損壊した北多久町の家屋 (平成24年7月14日撮影)



▲北多久町原口地区の林道崩落現場 (平成24年7月14日撮影)



▲西多久町二重地区の土砂崩落現場 (平成24年7月14日撮影)



▲危険水位を越えて増水する東多久町羽佐間の牛津川 (平成24年7月13日15時撮影)

昨年7月13日、

屋過ぎからの豪雨で、牛津川妙見橋(東多久町羽佐間)の水位は、氾濫危険水位を超え5.88メートルに達し、市では、15時に8地区(西の谷・庄・羽佐間・石原・古賀一区・古賀二区西・古賀山・古賀平)の494世帯1385人に避難勧告を発令しました。

24時間の総雨量は300ミリを超え、市内各所では冠水による道路の通行止めや住宅の床上・床下浸水、がけ崩れ等の土砂災害が発生しました。

中でも、土砂災害が深刻で、道路の崩落や、がけ崩れによる家屋の損壊が確認されるなど多数の被害が報告されました。こうした被災箇所では消防団等による迅速な応急対策が実施されました。

大きな傷跡を

残した昨年の豪雨では、避難勧告による避難および自主避難者は少数で、災害情報の適切な入手や避難に課題を残す結果となりました。

土砂災害への警戒を強化するため、気象情報の種類や情報の入手、避難経路、避難場所を再確認し、家庭、地域での災害への備えを万全にしましょう。

日頃からの災害への備えが肝心

1. 家庭、地域で災害への対策強化を
災害発生時は、慌てることなく対処することが大切です。すみやかに避難できるよう事前に安全ルートの確認、連絡体制などについて家族や地域で話し合うことが大切です。また、周辺環境の対策として、排水溝や側溝は、ゴミや落ち葉などが詰まった状態では、水の流れを妨げてしまいません。定期的な、点検、清掃に努めましょう。



■自主防災組織で対策強化

市内各地区で、災害時に迅速な対応を図ることを目的に自主防災組織を設けています。地域住民の防災意識の高揚のため、防災マップ作りや土のう作製講習会等を行い、地域一体となつて災害対応を強化する活動に取り組んでいます。



2. 屋外での危険を避ける

避難勧告が発令されても、水深がひざ下を越えると安全な避難は困難です。また、市が指定した避難所が遠く、避難が危険と判断される場合は、地区公民館などへ一時的に避難しましょう。

屋外では、単独行動は避けて、蓋の外れたマンホールや側溝など、水に浸って見えませんので注意しましょう。